

「大貫かんぼやま委員会」（宮城県大崎市）寸劇に
「パラダイス」の台本を提供

昨年末、1通のメールがコネットあてに送られてきた。「大貫かんぼやま委員会・太田孝会長」からのもので、「同委員会が主催する地域の祭りで、葬儀をテーマにした寸劇を演りたいが、台本を作るのにネタ本がなく、ネット検索していたらコネットのHPを見つけた。コネット劇団の台本を提供してもらえないか」との内容だった。葬儀スタイルは地域により異なるものでもあるし、書き換えて原本の意図が変わってしまう可能性も危惧されたが、理事会・パラダイスの判断で提供することを決めたのだった。

年明けの1月22日（日）、宮城県大崎市田尻大貫地区にある大貫小学校の体育館で祭りは開催された。朝9時半開会、午後2時まで文化祭・演芸会・夏祭りを混在させたかのような地域の多彩な内容のメインイベントに、大貫地区の老若男女約800人が集まり、小学校の体育館は人であふれかえった。

東日本大震災の余韻があちこちに残る東北地区で、比較的軽微な被害で済んだとはいえ、この地区も震度6強の揺れで、本来会場となるはずだった市民会館の修復が間に合わず、先んじて修復が終わったばかりの小学校の体育館を使用したのだという。体育館は寒かった。板張りのフロアに莫塵を敷き、大型の暖房機器2台が入っていたが、それでもコートが脱げないほど冷えており、この時期に地震が来て避難生活を送らざるを得ないとしたら、いかにも過酷な環境と思われた。

寸劇は最後の出しものとして、午後1時20分から始まった。ストーリーの流れは同じだが、台詞はご当地言葉で、原本にはない「講長」（集落の世話役。昔は各村落単位で互助組織のような役割を果たす「講」が存在した）や、お寺の和尚さん、ご近所さんなどが登場し、体育館の大きな舞台上で巧みな演技が繰り広げられた。出演者は練習時間が少なかったこともあり、台本片手に台詞をしゃべったり、アドリブで観客を沸かせたりする場面も多かったが、「葬儀」は、高齢化率35%近いこの地区にとっては常に関心の高いテーマであり、とりわけ震災以降、東北各地で葬儀費用の捻出も間に合わない人たちが大勢いたこととあいまって、笑いの中にも深刻さを嗅ぎ取ることができた。

劇は約30分間つづき、最後に「葬儀は消費者契約のひとつ。見積もり段階でのチェックや、事前に葬儀のことを考えて準備しておくことも大切」との解説がつき幕を閉じました。祭り全体が地域を元気づける、癒すという色合いが強く出ていたこともあり、コネット劇団以上の「はじけた場面」が沢山あったものの、楽しむことはできたように思う。また、「台本は大阪のNPO法人消費者情報ネット・コネットの提供・協力をいただいた」と紹介された（開会式、開演前、終演後の都合3度紹介された。ついでに私も紹介され照れくさかった）。

コネットは大阪府知事認可のNPO法人だが、遠く離れた東北で私たちの活動が役に立ったことを確認できた意味は決して小さくはない。今回の私の東北行は「寸劇鑑賞」が目的ではなく、個人的な旅のきっかけに過ぎなかったが、結果的には多くのことを学んだように思う。可能ならもう少し時間の余裕を取って、気仙沼や陸前高田などの被災地も訪ねてみたいと思案している。

余談だが、今回訪れた大崎市田尻地区は、宮城県北部の町でハクチョウなど、多くの渡り鳥が飛来する場所として有名だ。駅から小学校に向かう道の両側に田畑や沼が広がっているのだが、この日は積雪20センチあまりで沼か田んぼか区別のつかない場所に、ハクチョウが数十羽佇んでいた。漁村や島で見かける「野良ネコ」のような感覚だ。ちなみに「かんぼやま」とは、この地域のランドマークのひとつ「加護坊山（かごぼうやま）」を、地元の人たちが話すと「かんぼやま」と訛るところからの通称である。

(佐久間雄二郎 記)

